

jdzb echo

変貌するアジア、そして日独の協力

高野紀元日本国大使

(1) グローバル化の中でアジアの経済成長が注目を集めているが、国際経済にとっても良い影響を与えている。東アジアの相互依存が進展しており、事実上の経済統合が進んでいる。このような背景の下で開催された東アジア首脳会議は歴史的に重要な意味を持ち、首脳レベルで共同体形成への明確なビジョンが示された。その具体化に向けての本格的な議論が開始されるが、日本の主張により、透明性、開放性、普遍的価値の強化という原則が合意されている。

(2) 「中国の急速な成長についてどう思うか？」との質問を良く受けるが、豊かに繁栄した中国は、脅威ではなくチャンスである。日中間の貿易量は大きく、日本の対中投資も大きく伸びている。中国との競争は、日本の国際競争力を強化するとの意味で、日本経済に良い影響を及ぼすであろう。日本経済は不良債権問題も克服し、回復してきている。

(3) アジアにおける最も重要な地政学的変化は、経済システムについてのイデオロギーの対立が終わったことである。中国、ベトナム等共産主義の国が経済改革を行

い、カンボジア和平が達成された。冷戦終結と共に協力の時代が始まり、ASEANは10カ国へと拡大し、経済統合へのモメンタムがもたらされた。

(4) 北東アジアでは朝鮮半島の分断が続き、台湾問題も不透明である。北朝鮮の核開発問題への対処が必要であり、地域経済統合の流れから北朝鮮だけが取り残されている。日本の北朝鮮に対する政策に変更はなく、二国間とマルチの問題を解決して国交を正常化したいと考えている。また、拉致問題の被害者家族に対して、日本の世論は強い連帯感を示している。

(5) 国際問題について、日独は、イラン核開発プログラム、中東情勢、スーダン情勢、バルカン情勢、テロとの闘い等、多くの点で共通の関心を有している。両国は、更に、民主主義、市場経済、人権という共通の価値観を有している。エネルギー、環境、感染症の問題にも日独は貢献できるであろう。

(6) これらの課題に、日独は国連やG 8 を通じて指導力を発揮できる立場にある。PKO活動についても、日独両国は90年代に積

極的な活動を行うようになったとの共通点がある。日本国民は軍事大国にならないとの強い政治的信念を有しており、攻撃的な軍備は有さず、非核3原則を堅持している。一方で、米国とは日米安全保障条約を締結して、防衛能力を補っている。

(7) 戦後、日本は経済協力を通じて国際経済の繁栄に貢献し、長年にわたって世界一のODA供与国であった。90年代からは、平和と安定の維持への貢献を強め、カンボジア、ゴラン高原、東チモールにおけるPKO活動、テロとの闘いの一環としてのインド洋における派遣部隊の艦船への給油、イラクにおける人道活動等を行っている。

目次

| | |
|-----------------|-----|
| 巻頭寄稿文 | 1~2 |
| プロジェクト報告 | 2~3 |
| その他の事業報告 | 4~5 |
| 2006年開催予定プロジェクト | 7~8 |

(8) 歴史問題によって近隣諸国の国民が日本に対して複雑な心情を有していることは良く理解しているが、日本を正確に理解する必要がある。右に言及した活動は、「軍国主義」とは何の関係もない。日本が国連安保理改革を望むのも、世界第2位の経済大国として、より積極的に建設的な役割を果たすことが、国際的な責任であって日本の国益でもあると信じているからである。

(9) 日独は国内問題においても、少子高齢化問題、社会保障改革等で共通の問題を抱えている。これらについて日独間の協力の一層の強化が必要である。特に、科学技術、投資、青少年交流の各分野での日独間の協力は有益と考えられる。

(10) ベルリン日独センターは、これまでも日独間の知的対話や青少年交流等に極めて重要な貢献をされてきている。去る2月2

1日の日独外相会談でもベルリン日独センターの活動が取り上げられ、ベルリン日独センターが今後、「日独構造改革対話」や「日独イノベーション・フォーラム」を開催することを両大臣とも期待を持って注目している。ベルリン日独センターが引き続き、日独間の知的対話の場として一層の貢献をされることを期待している。

写真下

高野紀元駐独大使講演会(2006年2月9日、於ベルリン日独センター)。

日独行政法シンポジウム「行政裁量と裁判所によるその統制」、2006年2月11日、東京

去る2月11日(土)、東京の学術総合センター(千代田区一ツ橋)において、標記の学術シンポジウムが開催された。

本シンポ最大の特色は、「日本におけるドイツ年」の公式行事の1つとして、日独両国の実務家(裁判官・弁護士)と研究者が初めて一堂に会したところにある。しかも、テーマは古くて新しい行政裁量と司法統制であった。参加者は、日本を代表する行政法学者を中心に、実務家も含め、およそ50人であった。

シンポは高橋滋教授(一橋大学)及び神橋一彦教授(立教大学)の司会の下、藤田宙靖・最高裁判所判事、ヘンリク・シュミーゲロー(Dr. Henrik Schmiegelow)在日ドイツ連邦共和国大使、当センターのアンゲリカ・フィーツ(Angelika Viets)事務局長の開会の辞及び祝辞をもって始まった。

午前中は、ヒーン(Eckart Hien)連邦行政裁判所長官「ドイツにおける裁判所による裁量統制」、川神裕・最高裁判所調査官「裁量処分と司法審査——日本の判例の分析」、グロス(Thomas Gross)ギーゼン大学教授「ヨーロッパの枠組みの中で見たドイツの裁量論」、山本隆司・東京大学教授「変容する日本の裁量論」という、合計4本の報告が行なわれた。



昼休みの後、午後の部は稲葉馨教授（東北大学）及び斎藤誠教授（東京大学）の司会で、質疑応答に移った。コーヒープレークをはさんで、3時間に及ぶ白熱した討論が繰り広げられた。

今回のシンポの特色は、日本側の参加者の中に、ドイツを研究対象とする人々ばかりではなく、アメリカ、イギリス、フランス及びヨーロッパ法の研究者をお招きしたところにある。これら4研究者からの「コメント」は、日独両国を超えてテーマを比較法的に論ずる実り豊かなもので、この視野の広がり、ドイツ側の参加者にも殊のほか好評であった。もとよりドイツ法研究者、そして実務家からも日本の最高裁判所、法務省はじめ弁護士の方々も活発に発言し、大変意義深いシンポとなった。

心地よい余韻が残る中、成田頼明名誉教授（横浜国立大学）による閉会の辞をもって、本シンポジウムは締めくくられたのであった。

その後、場所を東京のドイツ大使館大使公邸（港区南麻布）に移して、シュミーグロ大使閣下主催のレセプションが開催された。シンポ参加者に加えて、著名な日独の関係者が招かれており、レセプションの参加人数は130人にも及び、日独の親好を大いに深めるタベとなった。

本シンポの成果は、然るべき印刷媒体を通じて公刊したいと考えており、目下、引受先と交渉中である。

石川敏行（中央大学法科大学院教授）

シンポジウム『日本とヨーロッパにおける規制緩和とイノベーション』（2005年12月13日～14日）

グローバル化した世界では、あらゆる活動に「世界標準」に合わせることを求められており、これを支え推進するために国家レベルでは各種の規制緩和が行われ、個々の企業では世界戦略とイノベーションが行われている。

センターはこうした状況を踏まえて、日独の著名な研究者や企業人ばかりではなく、オランダの研究者やフィンランド・テレコム代表も招いて、すぐれて現代的なこの問題をめぐるワークショップとシンポジウムを開催した。13日の富士通総研でのワークショップでは、総研の研究者もくわえてきわめて専門性の高い報告と議論をおこなった。引き続き14日には、同総研ならびに経済広報センターとの共催で経団連会館において公開シンポジウムが開かれ、このシ

ンポジウムには300名ほどの聴衆が参加した。ここでは、世界規模での経済条件の急激な変化の分析がなされ、その変化に対応して実際に成功を収めている企業活動のコンセプトが語られた。なかでも、新生銀行の八城会長は、従来の日本式経営の常識に挑戦する同行の経営方針について歯切れ良く具体的に話され、多くの聴衆に強い感銘を与えた。フィンランドやオランダのように人口の少ない国では、かなりの産業部門において国内需要だけを対象としていた企業活動には限界があり、はじめからグローバルな戦略を考えざるを得ない。これにたいし日本のような市場規模では国内需要に目がいきがち傾向があるが、長期的な観点から見るとこれでは企業としての発展がないという指摘も印象的であった。

上田浩二(Prof.)

ベルリン日独センター副事務総長



『ドイツ絵本展への皇后行啓』、2005年12月26日

昨年2月に当センターの設立20周年記念事業としてベルリンで日本の絵本展とワークショップを開催したが、今度は11月26日に東京板橋区美術館で、これを表裏一体の催しとして、同美術館と朝日新聞の共催で、ドイツ絵本展を開いた。これは、ケルン近郊のトローस्टルフ絵本美術館の所蔵品のなかから「赤ずきん」に関する各種の絵本や資料、それにヤーノッシュ等の現代ドイツを代表する絵本作家の原画を展示したものである。開会にあたって開かれたシンポジウムにはトローस्टルフ絵本美術館から3名の方が参加され、日本の絵本作家や研究者とともに、赤ずきんについて楽しいお話が繰り広げられた。

ちょうどその1か月後に、絵本にご関心の高い皇后陛下がこの展覧会に行啓され、展示された絵本を熱心にご覧になられ、対応した美術館員に専門的なご質問をなされた。その後、同美術館の小さなカ



フェで関係者とお話しされ、絵本を通じた国際交流の意義を高く評価され、関係者の苦勞をねぎらってくださいました。

この展覧会は、ドイツの日本絵本展と同じように、これから1年間ほどいくつかの美術館で展示されることになっている。

写真上

展覧会『赤ずきんと名作絵本の原価たち』を視察される皇后陛下。随行する上田浩二ベルリン日独センター副事務総長と朝日新聞の小島章夫文化事業部長（右）。



写真左

エッシュバッハ＝シャボ教授（Professor Dr. Viktoria Eschbach-Szabo、チュービンゲン大学）講演会『ドイツ語になった日本語』（2006年1月13日、於ベルリン日独センター）。

エッシュバッハ＝シャボ氏は経済用語「Kanban」「Kaizen」、あるいは若者文化における「Manga」「Anime」や日常生活に浸透している「Futon」「Pokemon」「Tofu」を例に、日本語がドイツ語に及ぼした影響について生き活きと語った。

『たけのこプログラム』、2005年12月19日

ドイツの自動車メーカー、ダイムラー・クライスラー社の資金により、日独の高校生交流のために「たけのこプログラム」が設立された。東京のドイツ大使館において、ドイツのboomgarden外務次官ならびに日本の山中政務官が臨席され、事務局となる当センターとの間で調印式が行われた。

このプログラムは、日独双方の高校生が交流しやすくするために航空運賃を負担しようというものである（滞在費は出ない）。年間に双方から40名程度の高校生が訪問することを予定しており、訪問の時期に関しての制約はない。すでにコンタクトのある日独の高校間でホームステイなどの受け入れ可能なことが唯一の条件となっている。ご関心のある方は、ベルリン日独センター青少年交流部にお問い合わせください（hmakino@jdzs.de または nmiura@jdzs.de）。



（写真左から、敬称略）江頭啓輔（三菱ふそうトラック・バス株式会社社長）、ブルストラー（Harald Boelstler、三菱ふそうトラック・バス株式会社社長／最高経営責任者・CEO）、boomgarden（Georg Boomgarden、ドイツ連邦外務次官）、山中燐子（外務大臣政務官）、上田浩二（ベルリン日独センター副事務総長）、シュミーゲロー（Botschafter Dr. Henrik Schmiegelow、駐日ドイツ連邦共和国大使）、ディートリッヒ（Wolfgang Dietrich、ダイムラー・クライスラー株式会社シニアリプレゼンタティブ）



ドイツ大学学長会議と国公立大学団体国際交流担当委員長協議会の共催を得て、2006年2月28日に東京のイツ橋記念講堂で開催した日本におけるドイツ2005/2006記念シンポジウム『日独における高等教育改革——評価と将来構想』の参加者。シンポジウムの詳細な報告は本紙次号に掲載予定。

ブロックドルフ氏逝去（2005年12月24日）

去る12月24日に、ベルリン日独センターの元事務総長ティーロ・グラーフ＝ブロックドルフ氏（Dr. Thilo Graf Brockdorff）が享年71歳で急逝された。

氏は、1985年から13年の長きにわたり当センターの事務総長を務められ、設立後まもないセンターが日独の社会において認知されるよう全精力を傾け、これを通じてシンポジウムやワークショップなどのセンターの基本的な活動の形を定め、現在のセンターの基礎を築かれた。また「日独フォーラム」や「ハイテクおよび環境技術に関する日独協力評議会」などの政府間の会議体のドイツ側事務局をセンターが引き受けることになったのも、こうした氏のご努力によるところが大きい。センターが本拠としていたティアガルテン区の旧日本大使館を返戻し、1998年に現在のダーレムの地に移転したのも氏の事務総長時代である。

1998年にセンターを去られてからの氏は、ポツダム独日協会会長、そして独日協会連合会会長などの日独の友好交流団体の要職を最後まで務められ、とりわけ青少年の交流に力を入れ、一貫して日独関係の深化と拡大に倦むことなく努力された。こうした活動を通じて、ドイツだけでなく日本各地の日独協会やドイツに関心のある日本人にも知られ尊敬されていた。1998年には日本国政府からその功績を称えられ、銀杯を贈呈されている。

会葬は暮れも押し迫った12月30日に、氏のゆかりのボン郊外の小さな村でしめやかに行なわれた。寒風の吹きすさぶなか、内輪での葬儀であった。氏のご冥福を心からお祈りする。

ベルリン日独センター友の会

ベルリン日独センター友の会は、1986年6月13日に結成された登録協会であり、その課題はセンターおよびその活動を資金的に援助し、ベルリン市民および産業界との橋渡しをすることにある。そのために、ベルリン日独センター後援会とは相互協力を旨に協力している。

友の会はセンターのプロジェクトに関し次のワーキングサークルを構成して顧問的役割を果たしている。

「自然科学と工学」「経済と政治」

友の会連絡先：

Dr. Gerwald F. Grahe

E-Mail: freundeskreis@jdzbd.de

本センター広報紙「jdzbd echo」は2006年初頭よりメールによるpdf-版のみをご送付する予定でしたが、読者のご要望に答え、郵送による送付を継続することにいたしました。すでにメールアドレスをご連絡くださいました方々のデータは、今後メール送付を開始する場合に供えて保管させていただきます。

『日本におけるドイツ2005/2006』

2005年春から2006年春にかけてドイツは初めて日本で自国ドイツを包括的に紹介する大型事業を開催する。その重点は科学、経済および文化の3点にある。

URL: http://www.doitsunen.jp/index_JA.html



ベルリン日独センター後援会

ベルリン日独センター後援会は1991年9月に結成された登録協会であり、その活動範囲はドイツ全土に及ぶ。課題は主にセンターのプロジェクトに関する提案等とともに資金面での援助を行なうことにある。また、センターの日本側での知名度を上げることも活動の一環である。

後援会は内外の企業・個人および日本関係組織の入会参加を募集中である。

後援会連絡先：竹谷宗久 (Takeya Munehisa), Förderverein des JDZB e.V.
c/o Tōyō Global Service GmbH, Europa-Center, Tauentzinstr. 9, 10789 Berlin
Tel.: +49-30-264 930 0, Fax: +49-30-264 930 15

自然科学および工学

国際会議『Development into a Biomedical Metropolis: Experiences from Centers in Kôbe and Singapore (バイオ・メディカル・メトロポリスへ向けて——神戸とシンガポールの経験)』
 協力者：ベルリン・フランデンブルグ学術アカデミー
 開催期日：2006年3月27日

ジュニア・エキスパート・エクスチェンジ・プログラム——最終ワークショップ
 協力機関：ドイツ連邦教育研究省、ドイツ連邦経済省、日本外務省
 開催期日：2006年6月15日～26日

『地球週間』

協力機関：地球諸科学研究センター（ポツダム）、センター友の会・ワーキンググループ作業部会「自然科学」
 開催期日：2006年9月、京都開催


チェルノブイリ20周年医療研究シンポジウム『Scientific Evidence and Novel Therapy for Radiation-exposed Victims (被爆者のための科学的知見と新しい治療法)』
 共催機関：長崎大学、世界保健機関・WHO（ジュネーブ）
 開催期日：2006年11月30日

経済・政治、法律および
その他の社会科学

田中均（日本国際交流センター・シニアフェロー、前外務省外務審議官）講演会『欧亜間の戦略的パートナーシップ——10年間にわたる欧亜関係の展望および来る10年間への展望』
 開催期日：2006年3月21日

日独ワークショップ『Good Urban Governance – Capacity Building for the Future (グッド・アーバン・ガバナンス——将来に向けての組織的な能力の向上)』
 協力機関：インヴェント（ベルリン）、国際協力機構（東京）
 開催期日：2006年4月3日～4日

セミナー『Policy Coherence towards East Asia: Development Challenges for OECD Countries (対東アジア政治結束——OECD諸国が抱える開発政策上の課題)』
 共催機関：経済協力開発機構（OECD）開発センター（パリ）、アジア開発銀行（フランクフルト）
 開催期日：2006年4月11日

 ワークショップ『「日本におけるドイツ2005/2006」関連報道の状況調査および分析』
 協力機関：国際コミュニケーション・フォー研究プロジェクト（ICFP、東京）、在日ドイツ大使館
 開催期日：2006年5月16日、東京開催

会議『産業立地・東欧——経験比較』
 協力機関：経済広報センター（東京）、ベルリン日独センター後援会
 開催期日：2006年5月29日

日独専門家ワークショップ『高等教育の質保証』
 協力機関：資格認定・認証・品質保証研究所（パイロイト）、大学評価・学位授与機構（東京）、大学基準協会（東京）
 開催期日：2006年6月8日～9日

第5回国際オーラル・プロフィেশンシー・インタビュー（OPI）シンポジウム『言葉の普遍性と個性』
 協力機関：ベルリン自由大学、欧州日本語OPI研究会
 開催期日：2006年8月24日～26日

サマースクール『East Asian Integration (東アジアの統合)』
 共催機関：ロベルト・ポッシュ財団（シュトゥットガルト）
 開催期日：2006年8月27日～9月8日

会議『The Role of China and Japan in Asia's Integration Process. More than Economic Partners? (アジア統合過程における日本と中国の役割——経済パートナー以上に成り得るか)』
 協力機関：コンラート・アデナウア財団
 開催期日：2006年9月、上海開催

日独フォーラム第15回全体会合
 協力機関：国際交流センター（東京）
 開催期日：2006年10月12日～14日

会議『Homogeneity versus Multiculturalism – Immigration Issues in Japan and Germany (均質性が多文化主義か——日本とドイツにおける移民問題)』
 協力機関：フリードリッヒ・エーベルト財団（ベルリン）
 開催期日：2006年11月

会議『Social Corporate Responsibility (企業の社会的責任)』
 協力機関：ベルリン自由大学東アジア研究所、資生堂（東京）
 開催期日：2006年11月

日独の司書および情報専門家を対象とするワークショップ
 協力機関：複数の日本の大学
 開催期日：2006年11月・12月

文化および人文科学

展覧会『文化を超えるコミュニケーション——日独ポスター展』
 協力機関：造形芸術アカデミー（ケルン）、名古屋芸術大学、国際交流基金
 オープニング：2006年3月31日
 展示期間：2006年6月30日まで

第7回奨学生セミナー
 協力機関：ドイツ学術交流会（ボン）
 開催期日：2006年7月13日～14日

詳しくは
<http://www.jdzb.de-->> 各種行事

ご注意

掲載の行事のタイトルが英語で挙げられているものは英語で開催、そのほかのものはドイツ語で開催（一部日独または日英の同時通訳付）します。
 会場は、ほかに記載のない場合はベルリン日独センターです。

会議『Varieties of Democracy (民主主義のバラエティー)』

協力機関：ループレヒト・カールス大学
ハイデルベルク、国際交流基金(東京)
開催期日：2006年9月20日前後

シンポジウム『

——建築、社会学、美術、哲学の狭間における空間論——日本と西洋の比較』

協力機関：チューリヒ造形美術大学
開催期日：2006年10月19日～20日

シンポジウム『Kokoro or Heart: Site, Space and Situation (「こころ」または「ハート」——場、空間、状況)』

協力機関：東京大学21世紀COEセンター「共生のための国際哲学交流センター」
開催期日：2006年11月2日～3日

ベルリン日独センター
『一般公開の日』
2006年9月2日(土)

午後2時開館：
各種イベント、日本食屋台
午後7時より
ホールにて「日本の夜：音楽とシアター」

ホールは座席数が限られているため、出席希望者はあらかじめお電話(030-83907123)でお申し込みください。

ベルリン日独センターは、外国人のための日本語講座(初級 1～2、中級1～3、上級)を開講しております。初心者を対象とする初級講座(初級1)は毎年10月中旬に始まり、既習者は随時途中参加できますが、クラス分けのためのプレースメントテストを行ないますので、電話でアポイントを取ってください。

日独語通訳の勉強会も開会しております。

以上の件に関するお問い合わせは担当の関川までお願いいたします。

新しい出版物：

ベルリン日独センターの創立20周年を契機に、日独語による記念出版『ベルリン日独センター20周年』を刊行いたしました。本記念出版(無料)をご希望の方は、直接センターまでメールでお申し込みください。

ベルリン日独センターと日独協会(東京)の共同事業として、『日独交流の架け橋を築いた人々』を刊行いたしました。本書目次および注文先：
<http://www.iudicium.de/katalog/539-1.htm>

Eメールに関するお願い

スパム(一方的広告をはじめとする迷惑メール)が増加するなか、弊センターは hotmail.com および yahoo.com からのメールは受信を拒否させていただいております。また、特定添付資料の受信を拒否する場合がございます。弊センター宛送信メールが配信不可能の場合は、恐れ入りますが電話またはファックスにてご連絡くださいますようお願い申し上げます。ご迷惑をおかけいたしますこと、あらかじめお詫び申し上げます。

ベルリン日独センター図書室

ベルリン日独センター図書室の蔵書数は順調に増え続け、現在9700冊以上を所蔵しております。そのうち6割が和文書籍で、そのほかの書籍のほとんどが独文または英文書籍です。主に百科辞典や辞書、統計データ集等の参考文献を重点に収集しておりますが、教科書や日本の経済、政治、社会および文化をテーマとする専門書もあります。蔵書は「日本十進分類法」を基に分類されており、コンピュータで検索できます。

ベルリン日独センター図書室は開架閲覧式図書室です。図書の貸し出しは原則として行っておりませんが、文献の必要な箇所を図書室内でコピー(有料)することは可能です。開室時間はつぎのとおりです。

火曜日～木曜日 午前10時～午後4時

お問い合わせは桑原節子ドキュメンテーション部長までお願いいたします。

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター
Japanisch-Deutsches
Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2
14195 Berlin (Dahlem)
Federal Republic of Germany
Tel.: +49-30-839 07 0 (代)
Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de
Internet: <http://www.jdzb.de>

編集 ミヒャエル・ニーマン
(Michael Niemann)
Tel.: +49-30-839 07 186
E-Mail: mniemann@jdzb.de

最寄り駅 地下鉄3番線 (U3)
Oskar-Helene-Heim 駅